
ある奴隷の日常

氷霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある奴隷の日常

【Nコード】

N7163W

【作者名】

氷霧

【あらすじ】

中世ヨーロッパ風ファンタジーの世界で公爵家の娘から奴隷になった少女の日常を淡々と書いていく予定です。山とか落ちとかはありません。

最初の方は奴隷になる頃の話なので暗めです。

直接性交渉を描いた場面はありませんが、わりと露骨に行為の存在は書きます。戦闘シーン以外で暴力的な表現はあまりありません。主人はわりと鬼畜で、奴隷との間に恋愛とかそういう話には多分な

り
ま
せ
ん。

1・売買

「800」
「900」
「950!」
「1000」
「く・・・1001」
「1100」・・・

城が買えるほどの金貨を代価に、その日、フィエナは奴隷になった。

- -

「所有紋は焼印、刺青、呪印のいずれになさいますか？」

奴隷商の店員が尋ねる声が聞こえる。まだ奴隷のオークションは続いているはずだが、フィエナの買い主は会場を抜け出して裏に商品を受け取りに来たらしい。

「呪印にするつもりだ。こちらで彫るから魔術師を呼ぶ必要は無い。

」

店員に答えたこの声が買い主ということになるのだろう。もっとも、使用人ということもあり得るが。

（私を買ったのは魔術師なのね。生贄にされるのかしら・・・）

商品として運ばれた数日の間に麻痺してしまった心でそんなことを考えながら、フィエナは主人となるはずの人物が現れるのを待った。程なくして現れた買い主らしき男は、どちらかと言えば悪い意味で印象的だった。歳は分かりにくいが30前後だろう。美醜で言えば平均的と言えなくもないが、闇に親しいとされる黒い瞳と髪はどちらかと言えば忌まれるものであったし、何より半ば閉じられた三白眼が威圧的である。加えて口角は皮肉気に片側だけ持ちあげられ

ており、全体的に性格が悪そうな印象を与えていた。

「こちらがおまえをお買い上げくださった方だ。ご挨拶するんだ。」
「・・・フィエナと申します。」

店員の声に反射的に体に染みついてた挨拶を返してしまったことを少し後悔しながら、目つきの悪い男を見上げる。男性としてはその身長が高いわけでは無さそうだが、左足を鎖につなぐれしゃがみこんでいるフィエナからは遙か上に見えた。

「フィエナ・・・ね。手続きはさっきの書類で終わっているな。すぐに連れて帰る」

前半を独り言の様に、後半を店員に向かって言いながら、男はフィエナの腕をつかんだ。

「し、しかし、呪印を彫るのに必要な魔具と媒介のご用意にしばしお時間が・・・」

「必要ない」

店員の声を遮るように言うと、男はポケットから細長い容器に入った暗赤色の液体を取り出し、フィエナの周りに円を描くように垂らした。続いてフィエナの額に指を当てると、口の中で呪文らしきものを唱え始める。30秒ほどで呪文が終わると、液体を垂らされた地面が暗赤色に光り出し、続いてその光がフィエナの首の周りに集まったかと思うと、そのまま吸い込まれた。

「これでいいだろう。さっさと確認してくれ」

少し疲れた様子で男が告げると、茫然としていた店員があわてた様子でフィエナの首に手をかざし短い単語を発する。その単語に反応するように首に現れた紋様を確認すると、店員はうなずいた。続いて足枷がはずされ、フィエナは男に手渡された。男は

「来い」

とだけ言うとフィエナの腕を掴んで引きずるように歩きだす。そのまま奴隷商の建物を出ると、呼んであったらしい馬車に乗り込み、
「行ってくれ」

とだけ告げた。

馬車の中でフィエナは困惑していた。既に深夜と言つてよい時間帯の馬車の中は明りがあつても薄暗く、唯一の同乗者である目つきの悪い男は目を閉じたまま一言も発しない。

奴隷商に捕えられ売られるまでの間、主人に絶対服従以外のことは説明されなかった。フィエナ自身は貴族の出身であり、家には奴隷もいたが、直接接したことはほとんど無い。聞きたいことは山ほどあるが、自分から話しかけて良いのかどうかも判断できないのだ。（これからどうなるのかしら・・・生贄は痛いのかな、苦しいのかな・・・）

奴隷商に捕まつた時から覚悟したとはいえ、これからされることを思うと涙が滲んだ。買主本人かどうかはわからないが、この男が魔術師であるのは間違いない。それも、ある程度以上の力を持った奴隷を買うときには何らかの方法で所有者の印をつけなければいけない規則である。手軽な焼印や刺青が使われることが多いが、所有者が裕福な場合、呪印が好まれる。呪印は魔術による刻印であり、特定の単語に反応して所有者の印を浮かび上がらせる他、直接的に所有者を害する様な行動を制限する働きもある。フィエナはこの手の魔術に詳しいわけではないが、自らも多少の魔術が使えるだけに普通は魔術陣や特殊な薬品を用いた上で数時間かかる術であることは知っていた。それを薬品を用いたとは言え、その場で済ませてしまふ技量が低いとは思えなかった。

その魔術師が大金を払つて奴隷を購入する動機となると、真っ先には思いつくのは儀式魔術の生贄である。13歳のフィエナは処女であつたし、容姿も自惚れで無く優れているはずだ。

「あ・・・」

沈黙と恐怖に耐えかねて声をかけると、男は薄く目を開け、先を促す。

「お聞きしてもよろしいでしょうか」

「なんだ？」

「貴方様がたくしを買われたのでしょうか」

「そうだ」

「わたくしは儀式の生贄にされるのでしょうか？」

「金を払ってつまらないことをする趣味はない」

生贄にされるのではないとわかって、少し心が落ち着いた。見た目にもほっとしたのがわかったらしい。

「生贄よりも辛い扱いなどいくらでもあると思うがな。まあいい、説明は明日する。それまで質問は無しだ」

と言われてしまった。フィエナは再度襲ってきた恐怖に耐えながら、馬車が止まるまで沈黙を守った。

馬車が止まったのは、平屋の建物の前だった。暗くてよくわからないが、土地はそれなりに広そうであるものの、周囲の建物に比べると高さも大きさも控えめである。この家よりもフィエナの方が遥かに高額だっただろう。庭もさほど手入れがされているようには見えない。

ますます男の正体がわからなくなり混乱していると、

「何をしている。早く来い。」

と声をかけられた。いつの間にか男は馬車から降りていたらしい。鎖で繋がれていたためにもつれがちな足をおして、既に玄関の近くにいた男を慌てて追う。玄関を入ると中は真っ暗だった。

（使用人は寝ているのかしら）

不思議に思っていると、男が口なので呪文を唱え始めた。短い呪文が終わると、玄関とそれ続く廊下が淡い光で包まれる。廊下はまっすぐ前に進んだ後右に折れており、両側に並ぶ扉を見る限りでは、平屋ではあるもののそれなりに広い家の様だ。

明かりのついたのを確認した男は、

「お前の部屋はつきあたりを右に曲がってすぐ左の扉だ。夜着は部

屋の中にある。少しは食べ物も置いておいた。風呂に入りたければ一番奥の右の扉が浴室になつてゐる。好きに使え。俺は寝る」

と言ひ残すと、廊下のつきあたり左側の部屋に入つてしまつた。ついでいけないフィエナが呆然としてゐると、男が部屋から顔を出し、「言ひ忘れた。おまえ、古語はわかるか？」

と聞いてきた。古語と言うのは500年ほど前まで使われていたとされる言葉で、近隣諸国の言葉の祖と言われる。上流階級の子女は教養として簡単な読み書きくらいはできることが多い。

「え、ええ・・・」

突然話しかけられ、奴隸としての言葉使いも忘れて肯定の返事を返すと、

「なら、部屋の明かりは古語の『光よ』でついで『闇よ』で消える。無駄遣いするなよ。じゃあ、朝まで起こすな」

と言つて、男は再び部屋の中に消えてしまつた。

半ば呆然としながら言われた扉に入ると、月明かりの下、予想以上に広い部屋が見えた。言われた通りに

『光よ』

と唱えてみると、廊下よりはやや明るめの光がついた。原理は分からないが、部屋の隅に備え付けられた縦長の容器の上から光が出てゐるらしい。あらためて部屋を見渡すと、寝台と机、箆箆に化粧台まである。寝台の上には絹製の美しい夜着が、机の上にはパンと果物が置いてある。

（部屋を間違えたのかしら）

奴隸用とはとても思えない部屋に不安になつたが、既に限界にあつた肉体と精神は休息を求め、そのまま寝台に倒れ込むと気を失うかのように眠りに落ちた。

2・主人

「朝だぞ。起きろ」

聞き慣れない声に驚いて目をあけると、白い天井が目に入った。ここ数日見てきた檻が無いことにやや戸惑い周りを見渡すと、小綺麗な部屋と、その入り口からこちらを見る黒ずくめの目付きの悪い男が見える。

「あ・・・わたくしあのまま・・・」

「着替えもせずに寝たらしいな。汚れた寝具は自分で洗えよ」

「申し訳ございません」

粗末で汚れた奴隷用の服、それも布をを節約するために露出が多めのもの、のまま寝ているところを見られた恥ずかしさに顔を赤らめながら謝る。

「さてどうする？飲み物は持って来てやった。飲んだら食事にするか？それとも風呂が先がいいか？」

目覚めたときには気付かなかったが、あらためて見ると男は手に果汁らしきものを持っていた。これではどちらが主人かわからない。差し出された果汁を飲むと、柑橘系の少し酸味のある味がした。

「申し訳ございません・・・あの、先に体を拭かせていただいてよろしいでしょうか」

オークションの際にあられない姿を見られているとはいえ、薄汚れた姿を晒し続けることには抵抗があった。

「ならば浴室へ行け。場所は昨日言った通り一番奥の右側だ。タオルは浴室にある。着替えは持っていったてやる」

「いえ、あの・・・」

「何だ？」

「わたくしが浴室を使わせていただいてもよろしいのでしょうか」
「良いと言っている。湯や布を用意する方が面倒くさい」

立場をわきまえて遠慮してみたが冷たくあしらわれたため、すこす

ごと引き下がる。男は着替を取りに行ってしまったので、フィエナは部屋を出て、浴室があると言われた扉を開けた。そこには裕に3人は入れそうな湯船になみなみと張られた湯が用意されており、しばらく呆然としてしまう。そもそも入浴自体が贅沢品であり、庶民は基本体を拭くか、川で洗う程度。やや裕福な層はたまに公衆浴場に行くが、家に浴室を持つのは一部の貴族か豪商のみ。それを、洗い場のみならず湯を張った湯船まで奴隷に使わせるなどあり得ることではなかった。

「何を呆けている。入り方がわからないのか？ここには侍女はいないからな。自分で適当にしろ」

扉の前で固まっていたら、後ろから急かされた。

「いえ、あの・・・やはり湯船は・・・」

「おまえがぐずぐず言っただけ食事が遅くなるんだ。いいからさっさと入れ。これが着替えだ。着方は分かるか？」

再度の遠慮もあえなく却下され、着替えを渡される。自分で着替えなどしたこともなかったが、渡されたのは頭と腕を通して腰の部分を紐で縛るだけのシンプルなタイプのものの様だ。下着が無いのが気になったが、それを言う勇氣はなかった。

「わかる・・・と思います」

「そうか。なら、終わったら玄関を入って右側の部屋に来こい」

そう言い残すと、男は去ってしまった。

残されたフィエナは諦めて浴室に入った。奴隷商に与えられた服を脱ぎ、湯船に入る。久しぶりの入浴に癒されながら、一気に黒くなった湯に今の自分の今の立場を思い知らされて悲しくなった。ほっとしたら、これまでの恐怖と今後に対する不安が押し寄せてきて涙がこぼれる。

（お父様・・・お母様・・・リユーナ・・・ユーティス様・・・）
今は生死も知らない愛しい人々を思いながら、声を殺して泣いた。ひとしきり泣いた後、タオルで簡単に体をこすると、湯船が出る。正直なところ一人で入浴したことなど無いため、道具の使い方はわ

からなかった。

タオルで水気を拭くと、苦勞して服を着る。用意してくれた服は落ち着いた青色のもので、少しサイズは大きめだったが裾を引きずるというほどでもなかった。湯船で泣いたせいでかなり時間をかけてしまったはずだ。おそらく瞼は腫れているだろうが、化粧などしてごまかす暇はないだろう。そもそも、化粧の仕方もわからないのだが……。

（仕方ないわよね）

覚悟を決めて指定された玄関近くの部屋に向かった。

「えらく時間がかかったな……と、なるほどな」

「……申し訳ございません」

「いいから座れ」

「はい」

部屋に入るとそこは広めの食堂と、そこに繋がる台所だった。浴室があるほどの家でこういう作りは珍しい。普通はキッチンが使用人が働く場なので、主人の食堂からは見え無いようにするものなのだ。食堂自体もこの規模の家にしては狭い。普通に座れば6人、つめても8人程度しかテーブルにつけないのではなからうか。一瞬、使用人の食堂なのかとも思ったが、それにしても調度が豪華だし、家の主人であるはずの男が席についているのがおかしい。

色々な違和感に苛まれながら、フィエナは野菜のふんだんに入ったスープが用意されたテーブルに着いた。本来、主人と奴隷が同席するなどあってはならないことだが、どうせ遠慮しても聞いてもらえないことがわかってきたので無駄な抵抗は止めることにした。

「どうせろくな物は食べてなかったのだろう。まずは食べる。食べながら話す」

色々なことがありすぎてあまり食欲は感じていなかったのだが、食べ物を目の前にすると空腹だったことに気づく。スプーンを手に取

り目の前のスープを口に運んだ。

「美味しい・・・」

「舌が退化してるな。まあ、不味くないのなら重畳だ」

「そんな。本当に美味しいです」

「適当に野菜を突っ込んで煮ただけのスープを美味しいなど言うては、お抱えだった料理人が泣くぞ。空腹は最高の調味料とは言いがな。そんなことより、別に話すことがあるだろう。」

まずは自己紹介だな。俺はウエルス・カタクラット。魔法学院の教師をしている」

「・・・以前お目にかかったことがございますでしょうか。お名前に聞き覚えが・・・確かロジェ公国の男爵様？」

「所領を持たない一代だけの爵位だがな。俺がパラクレス聖王国に旅行中に行ったときに舞踏会で挨拶したことがある。もつとも、一言一言言葉を交わした程度だったが」

「それで私の出自をご存じだったのでね。服の着方がわかるかどうか訊ねられたり・・・」

「知らなかったとしても、お前は貴族の娘にしか見えんがな。ところで、そちらは名乗ってくれないのかな？」

男が皮肉げに口角を上げながら尋ねる。

「フィエナ・パラエキアです。今更家名に意味があるとは思えませんが」

「ふーん。まあいい。パラクレスの一蒼姫>>あおひめ<<は有名なだからな。ルード皇国の黒姫と並んで美姫と名高い。もうすぐ14歳であらせられましたでしょうか。フィエナ・ウル・パラエキア殿下？」

「!？」

3・祖国

フィエナはパラクレス聖王国に名だたる大貴族、パラエキア公爵家の長女として生まれた。目じりが下がり気味なせいでやや茫洋とした印象があるものの、小さな顔には大きな目と小さく薄い唇がバランス良く配置され、抜けるような白い肌、輝くような金色に所々青みがかった髪と合わせて、神秘的な美しさを持つ少女として近隣諸国に知られていた。12歳を過ぎ貴族として結婚してもおかしくない年齢になると、婚姻の申し込みは引きも切らなかったという。奴隷商に囚われていた間にいくらか痩せてしまい、髪や肌も荒れてはいたが、今もその人並み外れた美しさは隠せない。ゆったりとした服のせいで目立たないが、未成熟な脚や腰回りに比しやや早熟な胸のアンバランスさもかえって魅力となっていた。

「わたくしは姫でも殿下でもございません。それに、今はただの奴隷でございます」

少し青ざめながら、フィエナは答えた。

（私を政治的に利用するつもりなのかしら）

自らの運命はどうしようもなくても、せめて祖国に迷惑をかけることは避けたかった。公爵である父に「何があっても生き伸びなさい」と言われて送り出されたが、自らの存在が祖国の害となるのであれば命を絶つつもりであった。しかし状況がわからないので、どう振る舞うことが祖国の利益になるのか判断できない。家族がどうなったのかすらわからないのだ。

「お前はパラクレスがどうなったのかどこまで知っている？」

「奴隷商のところでは何も教えてくれませんでした。漏れ聞こえてくる会話では、騎士団は壊滅して、王城に籠城中と・・・」

「そうか。お前が王城を抜け出したのはいつだ？」

「何日前かはわかりませんが、ガルド＝ネル帝国が攻め込んで来て10日目だったと思います。テルテス砦まで攻め込まれ、王城も安全ではないからと妹とともに王城を出されました。公爵領に帰ろうとしていたところを山賊に襲われ、護衛とはぐれてしまったところを奴隷商に捕まってしまったのが、城を出て3日目です」

「そうなる・・・捕まったのが11日前だな。5日前、王城は落ちた」

「!・・・」

半ば予想していたとはいえ、やはり祖国の凶報はショックであった。「国王と王妃は処刑。皇太子も死んだらしいな。第2王子はたしかお前の婚約者だったか？こいつは行方不明。第3王子は敗残兵をまとめてルンバート侯爵領に落ちたが、既に城を包囲されて時間の問題だな。王族は王太后も王女も王弟も処刑されたらしい。かなり血の薄いものを除いてほぼ全滅だな。」

お前の家族は・・・公爵は死亡が確認されている。公爵夫人は不明だが、恐らくは一緒に死んでいるだろう。妹はおまえと一緒に奴隷商に捕まった後、色が魔術の触媒や生贄向きだったので魔術の盛んなオーセリア王国に運ばれたらしい」

さらに惨い現実を突き付けられ、床に崩れ落ちそうになる。

（お父様とお母様は亡くなり、ユーティス様は行方不明。リユーナは生贄になんて・・・）

手を伸ばしたウェルスに支えられ倒れることは免れたが、体に力が入らなかった。一度はこらえた涙がまた溢れてくる。一度流れてしまつと、止めることができなかった。

小一時間ほど泣き続けただろうか。疲れて泣き続けることもできなくなり視線を上げると、ティードはどこから取り出したのか本を読んでいた。あまりの無関心にショックを受けたが、奴隷の扱いとしては、放置されただけましなのかも知れない。泣き声が止んだこと

に気付いたらしく、

「ああ、泣き止んだか。何か聞きたいことはあるか？」
と聞いてくる。

「・・・いえ。すぐには・・・。その情報は正確なのでしょうが」
他国の戦争の状況を、わずか5日で、それも大貴族とはいえ臣下の生死まで把握するなど、王家や騎士団でも難しい。それを一介の男爵が把握しているというのは不自然だ

「俺が現地に行かせた使い魔経由で仕入れた情報だからな。偏りはあるがほぼ間違いないはずだ。お前の妹のは、お前を買ったときに奴隷商に聞いたんだよ。多分嘘はついてないだろ」

（ああ、では、もう皆に会うことは叶わないのだ・・・）

最後の希望も打ち砕かれうなだれていると、

「もう聞くことはないんだな？じゃあ、これからの生活で必要なことを説明する。繰り返しするのは面倒だからちゃんと聞いておけ」

と追い打ちをかけられる。黙って頷くと、大量の言葉が降ってきた。

「まず、お前につけた呪印についてだ。元貴族なら大体知っていると
思うが、所有の印であるのと同時に、一種の呪いだ。ある程度行動を制限する作用がある。制限されるのは、主に直接的な危害を加えることと、主の許可なく自分を傷つけることだ。正確にはできなくはないが、とてつもない苦痛を伴う。過去、主人の殺害や自殺に成功したものはいないそうだ。苦痛に発狂したものはいるそうだが。
あと、俺はその印を目印に居場所を探ることができる。逃げてても無駄なのでそのつもりで。」

「この家に住んでいるのは、今のところ俺とおまえと俺の使い魔だけだ。使い魔はあと数日は留守だがな。当然、着替えや入浴を自分でするのはもちろん、家事もしてもらう。あとの仕事は性欲処理だな。服装は俺が指定しない限り好きにしていだが、家の中では下着はつけさせないのでそのつもりで。それ以外はお前に何ができるか
見てから決める。それなりの教育は受けているのだから、使え

ることがあれば使う。当面一人での外出は許可しないが、外にさえ出なければ空いた時間は好きにしている。何か欲しいものがあると言えば。俺に益がありそうなら買ってやる。」

「何か質問は？」

「しょ、少々お待ちくださいませ」

一気に大量の情報を渡されて、パニックに陥る。少し時間をかけて心を落ち着けてから、内容を咀嚼した。

（住んでいたのがこの方と使い魔だけと言うのはどういうこと？この広さの家で使用人が誰もいなかったということなの？私が家事をしたことが無いことを知っていて買ったはずなのに……。それに、性欲処理……）

もちろんフィエナとて、奴隷となり異性に買われた時点で、そういう対象として扱われることはわかっていた。それでも「性欲処理」という言葉でつきつけられると、やはり辛い。少々変態的な趣味がありそうなのも不安だ。

（それでも、奴隷の扱いとしては良い方なのよね……。きっと）

「あ、あの……。貴方様のことは何とお呼びすれば」

「そうだな、ご主人様、でいいだろう」

「はい。ではご主人様、ご主人様はこれまでご自分で家事をしておられたのでしょうか。先ほどのお言葉だと、ご主人様の他は使い魔だけとのことでしたが」

「いや、ここ5年ほどは主に使い魔がやってた。今みたいに留守の時は、最低限のことだけ自分ですが」

（猫やカラスが家事をやっていたのかしら？ちょっと想像がつかないけど、使い魔ならできるのかも知れないわね）

そんなわけが無い気もするが、無理矢理納得する。先ほど食べたスープをこの主人が作ったらしいというのも信じがたいが、それを聞いてはいけない気がする。

「わたくしは家事をしたことはございませんが、どのようにして覚

えれば・・・」

「とりあえず、2、3日は俺が教える。その後は使い魔に聞け」

「いえ、あの・・・どうやって・・・」

「会えばわかる」

「はあ」

「終わりか？」

「・・・」ウル”を手に入れてどうなさるおつもりですか？」

「それを直接聞いてどうするのかこちらが聞きたいくらいだが・・・
お前を買ったのは、単に容姿が優れていたからだ。競り合った相手
は知らんがな」

はぐらかされた気もするが、これ以上は答える気が無いのだろう。

「今度こそ終わりか？では、買い物に行くぞ」

「いつてらっしゃいませ」

「何を言っている。お前のものを買いに行くんだ。ついてこい」

「は？」

4・ 買物

「買物と申されましても、何を買いに？」

「服も履き物も持つてないのだろう。俺は知らないが、化粧品なんかもいるのではないのか？」

「わたくしも詳しいわけではございませんが、普通奴隷の衣服は古着を適当に手直しして与えるのではないかと。化粧は元々舞踏会の時くらいしかいたしませんでしたし、そもそも奴隷に化粧品など聞いた事ございませんわ」

「身近をうるうるするものがみすばらしい恰好だと俺が不快なんだよ。いいからつべこべ言わずついてこい」

「そうおっしゃられるのであれば参りますが……。そう言えば、馬車は呼ばれたのですか？」

「いや、そう遠くないから歩いていく。靴はこれでいいだろう」

と言いながら、女物の靴を1足持ってきた。仮にも貴族が馬車を使わずに買物に行くのは珍しい。そもそも、貴族の服は仕立て屋を呼ぶのが一般的なので、店の位置を知らないことも少なくない。恐らくは生まれながらの貴族では無いのであろうが、奴隷の扱いと言いかかなり変わっていることは間違いなさそうである。

（今のところは悪い方向に変わっているわけでは無いから良いのだけれど・・・）

何を考えているのかわからないというのは恐怖ではあるが、考えても仕方の無いこともまた事実。とりあえず不安を横において、与えられた靴を履くと、主人の後を追った。靴はやや大きめだったが柔らかく、やはり奴隷に与えるようなものでは無いとフィエナは思った。

自分の足で外を歩いた経験のあまり無いフィエナが少し歩き疲れた

かな、と感じた頃、一軒の店の前で主人の足が止まった。振り返りフィエナが顔を真つ赤にしていることに気づくと

「ここだ・・・どうした？深層の姫君にはきつかったか？」

と聞いてきた。

「・・・いえ」

呼び方に異議を唱える気力もなく、答える。

（下着をつけずに往来を歩くのがこんなに恥ずかしいなんて・・・）
服の裾は決して短くは無いが、風は無いとは言えず、捲れてしまわないかどうか気が気ではない。春になったばかりの気持ちの良い日和であり、こんな事情さえ無ければ街並みを見ながら歩けたのにと
思うと恨めしい。改めて今の自分の立場に悲しくなりつつ、店に入ってしまった主人を慌てて追った。

「あの・・・本当にこちらで買われるおつもりですか？」

「他に店を知らん」

「ですが、こちらは貴族用の店では？」

「そうだな」

そこに飾られている布や衣服は、フィエナが御用達にしていた仕立て屋の商品ほど豪華ではないものの、絹やレースがふんだんに使われ、どうみても奴隷が着るような服では無い。固まっているフィエナを余所に主人は、

「貴族の娘も城に侍女として上がることもあるんだ。家事のできる服くらいあるだろう」

などと言いつつ、出迎えにきた店員の元に行ってしまった。どう動いて良いのかわからず佇んでいると、主人と話していた二人の女性店員が寄ってきた。

「ご利用は承りましたわ。ささ、こちらへ」

と言いつつ、店の奥に手をひいて連れて行かれる。何かもつどうでも良くなってきた、大人しく連れられて行った。

結局、使用人の服2着、外出用2着、部屋着2着、夜着2着、下着2セット、履き物2足、その他小物に加え、簡易のドレスも1着選ばされた。着せ替え人形にされるのは慣れているが、状況もわからずあれこれ選ばされるのは精神衛生上よろしくない。もともと、着たことの無い服を選ぶのは楽しくないわけではなかったが。

「終わったか？まあ、悪くないな」

ぐったりしながら店の奥から出てくると、主人が声をかけてきた。ちなみに今の服装は外出用の服の内1着だ。淡い緑の袖の短い上着に、同系色の膝より少し短いスカート。腰に濃い色のベルトを巻き、肩から桃色のストールを、膝下から足首まで細い毛で粗く編んだものをつけている。貴族の着るドレスはほとんど足を露出しないので着られないフィエナは正直落ち着かない。しかし、これ以外に購入した服は仕立てが必要ですぐ着られるものはこれしかなかったので、選択の余地は無かった。

「あ、ありがとうございます」

容姿に対する賞賛など聞き飽きるほど聞いてきた身ではあるが、しなれない装いでは勝手が違う。

「ですが、奴隷にこのように多くの着物を与えずとも・・・」

「お前の着てきた服に比べれば気にするほどのものではないだろう。それに、お前の値段に比べれば誤差の様なものだ。俺の目を楽しませるのも仕事の内だと思って着るものは選べ」

「はい・・・」

公爵家には夜伽を目的とした奴隷はいなかったものでわからないが、そういうものなのだろうか。主人に買われてから、自分の常識に反することが多すぎて自信が無くなってきている。

（考えても仕方の無いことよね）

非常識であっても、自分はこの主人に買われてしまったのだ。慣れるしかないのだろう。そう諦めつつ、帰路に就いた。

「残りの品は後日お届けいたします」

と言った店の主が、主人と目配せをしていたことに嫌な予感を覚え

ながら・・・。

着せ替え人形になっている間に馬車を呼んでいたらしく、店を出ると既に馬車が止まっていた。日はすでに傾いており、夕方と言っても良いころ合いだ。主人に続いて乗り込むと、中に肩幅ほどの大きな箱が二つ、既に馬車に乗せられていた。

「ご主人様、こちらは？」

と尋ねると、

「近くの店で料理を作ってもらった。今日から料理をしるとしても無理だろう」

との返事。もつともだと納得しながら、これから自分が料理と家事を覚えるという事実にあまり現実感を感じられなかった。家に意識を飛ばしたことで思い出したことがある。

「申し訳ございません。ところで、お屋敷で私が休ませていただいた部屋なのですが、別の部屋とお間違えではないでしょうか。あまりに分不相応かと」

「おまえもいちいち細かいことを気にする奴だな。あそこで良いんだよ。他に部屋が無い。俺があ部屋で寝ることもあるだろうしな」最後の一言の意味を理解して気が沈んだが、何とか

「あまり細かいとは思えませんが・・・ご主人様がそうおっしゃるのでしたら使わせていただきます」

と返すことができた。昨日は疲れていたからか身体を求められることは無かったが、今夜はそうは行かないだろう。行方不明の婚約者の顔を思い浮かべて流れそうになる涙を堪えている内に、馬車は家にたどり着いた。

4・ 買い物（後書き）

「日常」になかなか辿り着けません・・・

5・初めての・・・

目が覚めると、白い天井が目に入った。

何となく既視感を感じながら体を起こす。どうも、ベッドに座ったまま寝付いてしまったらしく、足はベッドからこぼれているし、布団もかぶっていないかった。外を見ると、日の出を少し過ぎたくらいの様だ。

（あ、あれ？）

自分の身体に感じる違和感の無さに戸惑う。昨日は帰宅した後、例によって主人と同じテールで食事を取り、入浴し、昨日買った夜着に着替え・・・覚悟を決めて寝台の上に座っていたはずだ。

（こ、来なかった？）

一瞬、眠っている内に純潔を奪われたのかとも思ったが、さすがに自分で気付かないということは無いだろう。どうも昨日は危機を逃れたらしい。喜ばしいことながら不可解な気持ちに捕らわれつつ、簡単に髪を整えると、服に着替えた。まだ他の服は届いていないので、昨日と同じ服だ。

（そう言えば、朝どうするようにも言われてないわね。どうしたら良いのかしら？）

主人が起きているかどうかもわからなかったが、部屋にじっとしていても仕方が無いので、とりあえず食堂に向かうことにした。まだ自室と食堂、浴室とトイレ以外は入ったことが無いので場所が分からないのだ。食堂の扉の前に立つと、何やら物音がする。慌てて扉を開けて、中に入り、

「おはようございます。遅くなって申し訳ありません」

と挨拶をした。起きる時間としてはそんなに遅いわけではないが、奴隷が主人より遅くては問題だろう。

「ようやく起きたか。2日目にして熟睡とは、割と度胸があるみたいだな」

と、何やら台所で作業しながら少々皮肉の利いた返事があつた。

「も、申し訳ございません。あの・・・ご主人様は今何をしておられるのでしょうか？」

「この時間に台所にいるのだから、朝食を作っているに決まっているだろう」

馬鹿にした声で言われれば確かにそうなのだが、フィエナはそもそも料理をしているところ自体をあまり見たことが無かった。しかもこの主人と料理がイメージ的にどうしても繋がらない。とは言つても、主人が料理をして、奴隷がそれを見ているわけにもいかない。

「あの、わたくしが」

「できるのか？料理なんて。とんでもないものを食べさせられるのはごめんだ。もうできるからとりあえず座つてろ」

「はい・・・」

自分が何もできない事実に対し落ち込みながら、テーブルに着いた。主人の言つた通り、ほどなく朝食が出来上がる。今日の朝食はパンをミルクに浸して香料で風味をつけて焼いたものと、溶き卵を炒つたものらしい。運ぶのはフィエナも手伝い、食事となつた。主人は特に話しかけてくるでも無く、淡々と食べている。その姿を見ながら、まとまらない思考を巡らせていた。

（いったいどうしてこの方は私を買つたのかしら・・・）

フィエナの購入金額である金貨１１００枚というのはつきり言つて異常な額だ。相場を知っているわけではないが、それでも一般的な奴隷が金貨２０枚を超えるということはないだろう。

（家事もできない私を何十人分もの金額で私を買つて、今のところ生贄するわけでもないし、慰みものにもされなかった。仕事は家事と性欲処理とは言われたけれど、それだけならもっと安くして優秀な奴隷がいくらでも買えるはずだわ。

やはり、わたくしに流れる血が目的なのかしら。それにしても、これまでの扱いは不可解だけれど・・・）

等と考えていたら、じつと見ていたことに気づかれたらしい。

「何か用か？それともお姫様の口には合わなかったか？」

と聞かれた。

「いえ、そんなことは・・・とても美味しいです」

その言葉に嘘は無かった。昨日のスープもそうだったが、食べなれた繊細な味ではないものの、十分に美味しいと言えるものだ。

「じゃあなんだ？」

「いえ・・・色々混乱してまして。不躰に見つめてしまい申し訳ありませんでした」

少々気恥ずかしさを覚えて視線をそらしながら答えると、何やら誤解されたらしい。

「ああ、昨日の夜は何もしてないぞ。奴隷を買ったらやってみたいことがあってな。そのための準備中だ」

などと少し口元を上げながら言われた。その内容に果てしない嫌な予感と少なからぬ恐怖を覚えて、

「あ、あの、準備とはどのような」

と尋ねるも、

「秘密だ。いずれわかる」

とにべにも無い。わずかな安堵と大きな不安が次々にもたらされる状況に疲れてしまい、話す気力を失ってしまったフィエナは、しばらく黙って食事を続けた。

食べ終わるのが近づいたところで、今度は主人から話しかけられる。

「今日の予定だが、昼までに最低限の家事を説明する。何度も説明する気は無いので、一度で覚えるように」

「はい」

「昼過ぎからはしばらく家で仕事をする予定だ。地下に籠るので、その間に掃除をしておくように。掃除が終わったら好きにしている。することが無ければ、書架の場所を教えるから本でも読んでい」

「わかりました。勝手に本を読んで構わないのですか？」

「構わん。本の扱い方は知っているな？」

「それは存じておりますが・・・」

最近になり印刷技術が開発され急速に値が下がりつつあるとはいえ、まだまだ本は高価なので、普通は奴隷はおるか使用人に触らせることは無い。つくづく世の常識は通じない相手らしい。

「なら問題ないだろう。夕方には上がってくる。特に急用が無ければ声をかけないように。無いと思うが、来客があれば玄関で待たせて呼びに来い」

「はい」

「では、さっさと食べてしまえ。終わったら仕事だ」

「は、はいっ」

いつの間にか止まっていた口を慌てて動かし、フィエナは朝食を食べ終えた。

それから数時間後・・・うなだれてテーブルに突っ伏すフィエナとそれを冷たい目で見つめる主人の姿があった。

「おまえ・・・」

あきれ果てたような主人の声に、フィエナの身体が小さく跳ねる。

「も、申し訳ありません・・・」

顔をあわせる気力もなく、下を向いたまま謝罪した。

元々、自分がそんなに不器用だと思ったことは無い。見た目だけのお嬢様にならないよう、貴族の淑女として多少の楽器や刺繍等はたしなんだし、学問や魔術も基礎的なことは学んでいる。年齢的な限界はあるものの、どれも人並み以上にはこなしていたはずだ。むしろ楽器など、同年代の貴族の少女の中では一二を争うほどだった。

それにもかかわらず、この数時間で学んだ家事は壊滅的だった。食器を洗おうとすれば割る、床を掃こうとすれば調度品を落とす、洗濯しようとするれば服を破る・・・刃物の扱いは意外に苦手でないのか辛うじて料理だけは大きな失敗はしなかったものの、それ以外はまともにできたものが無いと言って良かった。家事などしそうなない主人が器用にこなすのと比べ、自分のあまりの無能さに情けなさに涙が浮かんだ。

「これは・・・予想以上にひどいな。おまえ、貴族に生まれて良かったな。貧乏人の家だったら立場が無かったぞ」

ひどい言われようだが、事実だけに反論できない。

「まともに家事ができるようにするより、魔術を教え込んだ方が早いかもしれんな」

「え・・・？」

言われたことが理解できずに顔を上げる。

「ああ、こういうことだ」

と言うと、主人は短い呪文を唱えた。部屋の中に静かな風の流れることができる。どうも部屋にこく弱い竜巻の様ならせん状の風の流を作っているようだ。しばらくすると、部屋を中心にゴミや埃の小さな山ができていた。

「こんな感じだな。できることとできないことがあるが、掃除や洗濯はだいたいできる。洗いものは無理だがな」

フィエナは目を丸くする。

「このような魔術、聞いたこともございません」

「それはそうだろうな。俺も自分と使い魔以外が使うのは見たことが無い。そもそも、魔術を実用的なレベルで使えるのは大多数が貴族だし、そうでなくても自分で術が開発できるほどの魔術師なら高給を得るのは難しくない。となれば家事は使用人か奴隷にさせるから、そもそも魔術で家事をしようなんて発想そのものが無い。別に難しいことをしているわけじゃない。やろうと思った奴がいなかっただけだ」

「それはそうなのかも知れませんが・・・」

とは言っても、主人が言うほど簡単だとは思えない。そもそも、魔術を使えるもののほとんどは既製の魔術を使うのがやっとで、術の開発などできない。それも、せいぜい光を灯すとか火をおこすとかその程度の者が過半であり、戦闘に使えるほどの魔術が使えれば、それだけでこの国でもそれなりの地位につけるほどである。どうも、能力的にもフィエナの主人は常識では測れないようだ。

「この後は一人で掃除をやらせるつもりだったが・・・そうすると
かえって俺の仕事が増えそうだな」

「申し訳ありません・・・」

「かなり予定外だが、仕方があるまい。どうせ使い魔が戻るまでだ。
おまえには家事用の魔術を使えるようになってもらうことにする。

魔術の入門書を渡すから俺の仕事が終わるまでそれでも読んでいろ」
「はい」

本当にそんなことができるようになるのか不安に思いながら、抗す
術のないフィエナは頷いたのだった。

6・魔術

自らの不器用さに沈んだファイエナは、自室で主人に渡された魔術書を読んでいた。主人は既に地下にこもっている。廊下に階段は無いのだが、玄関から入って突き当たりの左の扉の中が階段になっているらしい。

（簡単な魔術は使えますけど、魔術の勉強をするのは初めてだわ）
魔術というのは魔力を使う技術、なので、簡単なものはその原理を知らなくても使用可能である。十分な魔力を持つものなら、定型的な身振りと呪文さえ覚えれば魔術を発動させられる。祖国パラクレス聖王国では貴族のたしなみとして多少の魔術は覚えるものの、女性が強力な魔術を覚えることはよく思われていなかったため、ファイエナも明かりや水精製といった基本的な魔術をいくつか覚えただけである。女性が学問を深く学ぶことも好まれなかったのと年齢的なことから専門的な学問と言えるほどのものを学んだ経験は無いが、元々学ぶことは嫌いではない。きっかけはともかく、少し楽しみにしながら本を読み進めていた。

【魔術とは人間もしくは類似の生物の魔力を媒介として、この世界に存在しない”力”を召喚、もしくは送還し、術者の望む現象を実現する技術のことである。魔力自体は全ての人間、ほぼ全ての動物が持つており、周囲の空間にも存在する。生命活動は食事による栄養と魔力の双方を消費して維持されていると考えられている。ほとんどの動物、多くの人間の場合、食事による栄養が主たる生命活動の源であり、魔力の寄与するところは極めて少ない。反対に、魔族は生命活動の数割を魔力によって維持していると言われている。魔力は消費すると周囲の空間より吸収するため、生命活動くらいでは生体内の魔力が枯渇することは無い。かといって無限に吸収できるわけではなく、個体ごとに限界が存在する。本書ではこれを「魔力

容量」と呼ぶことにするが、この容量が魔術を使えるかどうかに大きく影響することになる。

魔力をほぼ全ての人間が所有することは前述したとおりであるが、かといって全ての人間が魔術を使えるわけではない。むしろ過半は使えない。これは単に魔力容量が事象を変化させる最低限の量を下回っているからである。魔力容量は血縁による影響が大きく、魔力容量が大きい親から生まれた子は大抵魔力容量が大きく、小さい親の子供は小さいことが多い。多くの国において貴族は魔力容量の大きい家系であり、婚姻によりさらに魔力容量の大きな人間を独占する傾向にある。一部の国においてはあまり知られていないことであるが、平均的な魔力容量は男性よりは女性の方が大きい。事実、過去に大魔術師と言われた人々の7割程度は女性である。今日に至るまで魔術の主たる利用が戦力としてのものであり、女性が戦争に参加すること自体がまれであるにもかかわらず、である。

話がそれだが、魔術を用いる者は、自らの魔力容量の範囲内で魔力を消費して魔術を行使し、周囲からその消費分を補うことを繰り返すことになる。個々の魔術に要する魔力には大きな個人差は無いが、一般に流布している構成は扱いやすさと安全性を優先しているため、同じ現象を引き起こす魔術をより少ない魔力で実現することは可能である。

魔術を術者の望む形で発動させるための”構成”であるが、その構築にはいくつかの流儀・流派が存在する。西方諸国では威力と発現速度に優れるが安定性の悪い古式魔術、威力に劣るが取り扱いの簡便な新式魔術、精霊を作成して魔術の構成を代行させる精霊魔術、神への祈りと言う形を取る神聖魔術などが代表的である。これらはいずれも構成の構築流儀の差であり、本質的な力の源は全て同じであることはあまり知られていない。新式魔術を始め複数の流儀で用いられている土水火風などの分類も、魔術を構成する上で理解しやすいという利点はあるものの、それ以上の意味は無い。一部で信じられているような、人には生来特定の属性（火なら火）があり、そ

の属性の魔術しか使えないと言うことも無い。もつとも、特定の系統の魔術に精通すると、他の系統を覚えにくくなる流儀は存在するが。」

ここまで読んだところで一息つく。自分が耳学問で得たことと異なる部分が多いことに驚いた。自分に初歩的な魔術を教えてくれた魔術師は男性であつたし、そもそもパラクレスに女性の魔術師はほとんどいない。その魔術の師も新式魔術と神聖魔術は全く別のものと理解していたようであつた。この本に書かれたことが正しいかどうかはわからないが、少なくとも大魔術師の男女比まで偽つたりしないだろう。

（祖国では優秀な魔術師を確保するよりも、女性を表に出さないことを優先していたということよね）

フィエナの価値観としては戦争に女性を関わらせないことが必ずしも悪いとは思えなかったが、そのために隠されていたことが多そうなことは残念に感じた。

（奴隷になつてはじめて自分が無知だつたことに気づくなんて皮肉なことね）

やや自嘲的になりつつも、ページをめくる作業に戻つた。

その後は、基本的な魔術の構成とその解説がひたすら続いていた。発光・点火・水の精製・土の隆起・微風の五つの魔術の解説だけで1冊を費やしているあたり、本当に自分で魔術の構成を作成できるような魔術師になることを目標にした入門書なのだろう。どうも、本気で家事のために魔術を学ばせるつもりらしい。

（非常識ではあるけれど・・・仕方ないわよね）

普通に家事を練習していたら、最低限のことができるようになるまでに多大な損害を出してしまいそうな自覚がある。それに、魔術を学ぶことは奴隷にとって決して悪いことではない。そもそも、フィエナにつけられている鎖は魔術によるものなのだ。場合によっては

呪印を解除することも不可能ではないかもしれない。そうはならない自信があるからわざわざ魔術を学ばせるのであろうが、頭の片隅に入れておいてわるいことではないだろう。そうやって多少強引にやる気を奮い立たせ、夕方、主人が上がってくるまでになんとか点火の魔術の章までを読み終えた。

もう少しで日が落ちるという時間になって、おもむろに部屋の扉が開かれた。もちろん、入ってきたのは主人である。心臓に悪いのでノックくらいはして欲しいところだが、奴隷が要求できるものでもないだろう。足音に敏感になるしかなさそうである。今はそれよりも、気になることがあった。主人が左手に何やら怪しげな細い壺のようなものを持っていたのである。そして、右手にはコップが見える。不吉な組み合わせに嫌な予感を覚えつつ、声をかけた。

「ご用でしょうか」

「ああ。・・・何故逃げようとしている？」

無意識の内に身体が逃げる体制になっていたらしい。

「いえ、少々嫌な予感がいたしまして」

「ほう。なかなか良い感をしているな。今回は役に立ちそうもないが」

（そこは否定して欲しかったわ・・・）

主人は机に近づくと、コップを置き、壺の中身を注いだ。注がれたのは、暗い赤色をした鉄と野草の匂いのする液体である。何等かの魔薬なのであろうが、フィエナには見た目で効果を推し量るほどの知識は無い。主人は液体を注ぎ終わると、やや嗜虐的な笑みを浮かべながら声を発した。

「飲め」

「・・・」

「どうした？」

「せめて、これが何なのか教えていただくことはできませんでしょ

うか？」

「飲んだら教えてやる」

「・・・・・・」

（はぁ）

どうせ逆らっても無駄なのだ。覚悟を決めて、コップ半分ほどの液体を飲み干す。吐き気を誘う生臭さを無理矢理抑えつけ、目元に涙を浮かべながら視線で問う。

「飲んだな。それは加齢遅延の魔薬だ」

「は！？」

この家に連れてこられてから何度絶句したかわからないが、一向に頻度が減る気配がない。

「倍率はいくつですか？」

「正確にはわからないが、1000倍くらいじゃないかね」

「意味がわかりませんわ！」

興奮のあまり言葉遣いがおかしくなった。加齢遅延の魔薬と言うのは、その名の通り歳をとるのを遅らせる魔薬だ。主要な原料が魔族の生き血であり、あまり保存も利かないため、非常に高価である。仮に魔族を捕えても、その生態上自殺を防ぐことができないのだ。その効果は魔族の魔力にほぼ比例し、魔力の高い魔族はそれだけ稀少で危険であるため、王族や高位の貴族でも、数年に1回、遅延効果2倍のものを1年分程度の量、つまり半年分程度歳を取るのを遅らせられる量、手に入れられれば良い方である。

それを、遅延効果1000倍と来た。1000倍ともなれば、3年で1日分程度しか歳を取らないことになる。事実上の不老だ。

「今の量でどのくらい効果が続くのですか？」

「それもわからない。試しに1滴飲んで3年程待ってみたが切れた様子は無かったな」

「・・・・」

もう溜息しか出ない気分である。効果時間は飲んだ量に比例する。今飲んだ量は、1滴の100倍は下るまい。この瞬間、300年以

上不老の身体を手に入れたらしい。”永遠の若さ”は世の全ての女性のあこがれであろうが、まだ14歳を目前にしたところのフィエナには素直に喜べ無いものがあつた。それに、そのような薬を飲ませた意図も気にかかる。これだけの効果の加齢遅延薬なら、それこそ1国にも匹敵するほどの値段がついてもおかしくない。城にも匹敵するフィエナの購入代金のはした金に思えるだろう。

「何故奴隷にそのような高価な薬を？」

「容姿で買った奴隷が歳を取らないようにすることに何か疑問があるのか？」

「これだけの薬であれば、それを売った代金でいくらでもお好みの奴隷が買えるかと存じますが」

「ああ、それは思いつかなかった。それに、こんな薬を売ったりしたら後が大変だしな」

（それはそうね・・・）

公爵家の一員だったフィエナでさえ、10倍を超える加齢遅延の魔薬など存在すら聞いたことが無かった。1000倍の効果を持つとなれば、それこそあらゆる手を使って手に入れようとする輩が絶えないだろう。金が手に入っても、命を狙われたのでは割に合わないと考えるのは不自然ではない。

「それにしても、どうやってこのような薬を・・・」

「たまたま手近で材料が揃うからな」

「・・・確か、加齢遅延の魔薬は魔族の血が必要なため大変稀少ないのだと記憶しているのですが」

「そうだな。まあ、しばらくすればお前にもわかる」

性格の悪そうな笑みを浮かべる主人に、この場で疑問を解消することとは諦めた。

その夜は、自分の身体が作りかえられていくような不快とも言い切れないが奇妙な感覚に悩まされつつ、何とか床に就いた。

7・変化（前書き）

読んで下さっている方、評価をしてくださった方、お気に入りに登録して下さった方、ありがとうございます。

説明が続きます。すいません。そろそろ登場人物を増やしたい・・・。

目標は10話までに+2人です。

7・変化

結局昨夜はあまり眠れなかった。身体が火照ったような痛痒い様な奇妙な感じで寝付けなかったのもあるが、どうも眠気自体があまり来なかった気もする。そう言えば、昨夜は食事も取らずに寝てしまったが、朝になってもあまり空腹感が無い。自分の体がどうなってしまったのか不安になるが、考えてどうでもなるものでもない。今日こそは主人よりも早く起きようと思い夜明け前に夜着から服に着替えて、はたと困った。

（起きたのは良いけれど、何をすればよいのかしら？）

家事には魔法が上達するまでは手を出さない方が良さだろう。となると、することがない。あまり喉はかわいていなかったが、とりあえず飲み物でも飲んで頭をすっきりさせようと思い、台所に向かうことにした。

まだ外は白み始めた時間だが、相変わらずこの家は明るい。そこでフィエナは様子がいつもと違うことに気がついた。廊下の所々にある光る液体を入れた細長い容器の上から光が出ているのはいつものことだが、同時に黄色っぽいもやもやとしたものがたゆたっているが見える。見回すと、廊下にある数個の容器すべてがそうになっているようだ。これも加齢遅延の魔薬の効果なのだろうか。主人に尋ねてみたい気もしたが、部屋に行つて起こす勇気もなく、食堂そこに繋がった台所に向かった。

『光よ』

いつものように古語で呟くと、部屋に明かりがともる。やはりこの明かりにも黄色っぽいもやは見えた。やはり、周囲ではなく、自分の目が変わったのだらう。台所で炭をおこし、湯を沸かす。普通はマッチで火をつけて屑や藁に火をつけてから木を燃やすらしいの

だが、この家では木に直接台所にある液体をかけると、すぐに木が燃えだす。昨日教えてもらった通りに液体をかけると、同じように火がついた。ところが、昨日は見えなかった赤色のもやが一瞬見え
た気がする。実害は無いが何となく気味が悪い。

（聞きたいことがあるときに限っていないのだから）

やや理不尽なことを考えながらお湯の沸くのを待っていると、

「今日は早起きだな。良く眠れたか？」

と声がした。この主人は足音と言うものを立てないのだろうか？度々驚かされることに少し腹を立てながら振り向くと、ニヤニヤとした顔をした主人の姿が見えた。

（ひどい主人では無いのでしょうか、好きにはなれないわ・・・）

どことなく楽しそうな主人を不愉快な思いで見つめながら、

「おかげさまで。ご主人様も何か飲まれますか？」

と返した。

「そうだな。もらおう。お前と同じものでいい」

と返事があったので、祖国の物に比べれば少し渋みの強いロジェ公
国産の紅茶を入れた。

「何か変わったことがあったか？」

二人分の紅茶を用意してテーブルに着くと、主人が聞いてきた。あったことを知っているのであるうに、わざわざ聞いてくるあたりが
正確の悪さを物語っている。

「ええ。明かりや台所の火をつける液にもやの様なものが見えます。

ご主人様はこれが何かご存知でしょうか？」

「魔力、だな」

「魔力？」

「正確には、指向性を持った魔力、と言うべきか。昨日渡した本を
読んだのなら書いてあったはずだが、魔力自体は人体にもそのあた
りの空間にもある。それは”力”だが、特に何をするでも無い言わ

ば”止まった”状態の力だ。対して、魔術や魔薬は”動き出した”魔力と言ったことができる。お前には”動いている”魔力が見えていくわけだ。何か魔術を使えば、似たようなものが見えるはずだぞ”

「そう・・・ですか。明かりと火種で色が違ったのは、種類によって違うということなのでしょう？」

「そうだな。ちゃんとした法則までは知らないが、熱が上がるものは赤っぽく、下げるものは青っぽく、明かりなんかは黄色っぽく見えることが多い」

「ありがとうございます。ところで、これは昨日の薬のせいなのでしょう？」

（他に理由は思いつかないけれど）

「そうだ」

「はぁ・・・。他にも何か効果があるのでしたら教えておいていただけないでしょうか」

「そうだな・・・。おまえは魔族についてどの程度知っている？」

「魔族、ですか？北方に住んでいる、人間と良く似た外見の種族ですよ。褐色の肌と黒髪・黒の瞳を持っていて、魔術に長けていると聞いています。国を作って、北の国と時折戦争をしているのではなかったでしょうか。あ、あと、その血や体が魔術の触媒や魔薬の原料として優秀だ言う話を聞いたことがあります。加齢遅延の魔薬の材料でもあるのですよね？」

「ふむ。まあ、間違っではないいな。西方8国・・・パラエキアが滅亡したから7国かで魔族と境を接しているのは北のオーセリア王国だけだからな。あまり馴染みがないだろう。お前が言ったような外見上の違いもあるが、もっとも大きいのは、魔力への依存の差だ。魔族の持つ魔力容量は大半の人間の魔力より遥かに大きい。そして生命維持や活動にも人より遥かに多くを魔力に依存している。ここが重要で、魔力による生命活動は年月により劣化しない。要するに、歳を取りにくい。魔族の平均的な寿命は150から180歳ほどと言われているな」

さらつと祖国が滅亡したと言われて反駁しなくなったが、首都が落ちて王族がほぼ全滅では抗弁にも説得力が無い。仕方なく、黙って話を聞く。

「そして、魔力に依存するところが大きい分、魔力に対する感覚も鋭い。魔力が高いものになると、肉眼で魔力が見えるそうだ」

「え・・・？」

「まあ、ここまで言えばわかるな。加齢遅延の魔薬は、体を魔族に近い状態にする薬だ。倍率2倍くらいでは大した変化は自覚しないがな。さて、効果だが、加齢が遅くなる他は、魔力が見えるようになる、魔力の吸収が早くなる、つまり魔力の回復が早くなる、食事や排泄の必要が減る、睡眠時間が少なくて済む、物理的な怪我をしても死にくくなる、代わりに魔力自体への攻撃には弱くなる、これくらいか。ああ、有名なところで、女は妊娠しなくなる。魔族と人間の間にはまだが子供ができるらしいが、何故かこの薬を使っている間にはできない。これせいで王妃なんかは世継ぎができるまでこの薬はご法度になってるな」

「子供ができないのは別に良いのですけれど、私は魔族になってしまったのですか？」

「別にそういうわけじゃない。魔力で維持されている部分が多い人間になっただけだ」

「どう違うのかよくわかりませんが・・・」

「魔族が魔族である最大の要因は、社会的に魔族であると認識されていることだ。人間社会では受け入れられず、素材として狩られかねない。それさえなければ、魔族と人間は隣で暮らしていても良いくらいには似た存在だからな」

「そうなのでしょうか」

「まあ、何にしても、人間の姿をしていて、意識と記憶がそのままなんだから、あんまり気にすることは無いだろ。俺は気にしなかったぞ？」

「では、ご主人様も？」

「当たり前だろう。でなければ、効果を知っているわけがない」

それはそうかもしれない。勝手に体を作り変えられたことに言いたいことはたくさんあるが、言っても無駄なのもわかっている。

（ものすごい勢いで忍耐力が鍛えられている気がするわ・・・諦めが良くなるのが良いことなのかどうかはわからないけれど。されたことが必ずしも悪いことばかりでも無いあたりが複雑ね）

今回の薬にしても、老いることが無くなり、食事の必要も減って、死にくくなるらしい。害どころか、大金を積んでも欲しい者が数え切れないほどいるだろう。なんとも複雑な心境になりつつ、疑問に思ったことを確認しておく。

「食事の必要が減るとのことですが、どの程度になるのでしょうか」
「今までの経験だと、1週間に1回程度食事をすれば、あまり空腹は感じないな。空腹感さえ我慢すれば1カ月程度は何も食べなくてもさして体に害は無い。そう言えば、使い魔から明日帰ってくると連絡があった。食事を用意するのも面倒だから、明日までは食事無しにする。食べたければ自分で適当に食べておけ」

「わかりました」

奴隷に勝手に食べておけとは・・・相変わらずである。今のフィエナの立場は、空腹に苦しむほとんどの奴隷と、多くの貧民に羨まれるものなのかもしれない。

（あまりご主人様に感謝する気にはなれませんけれども・・・）

「今日は何か予定がございますでしょうか？」

「昼過ぎまでは地下にいる。上がってくるまで昨日渡した本も読んでおけ。昼過ぎからは出かけるかも知れない。一応そのつもりでいるように」

「わたくしもですか？」

「当たり前だ」

普通、貴族は外出に奴隷など連れて行かない。あまり当たり前とは思えなかったが、そのまま主人が部屋を出て地下に行ってしまったので、疑問を口にすることはできなかった。仕方が無いので、綺麗

に空になった二つの紅茶のカップを片付けたあと、自室で魔術書の続きを読んで過ごした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7163w/>

ある奴隷の日常

2011年11月12日16時29分発行